

第 4 章 幼少期 I : 1947 年頃～1949 年頃 (10～12 歳)

子供心に憤りを覚えた話



フォガラの堅井戸の列：アウレフの町の郊外 (2002 年訳者撮影)

ある日人々が、ある男のゆるし難い不正行為について話しているのを聞いた。以下は、当時まだ小さかった私が、私なりに理解した内容である。それは 1940 年代の出来事だった。名前は生憎忘れてしまったが、その頃アウレフの有力者の中にある豊かな商人がいた。その男は、ベンドゥーラ (Bendraou) のフォガラに新しく一つのタルハ (tarha) (堅井戸) を追加する工事に出资することになり、契約にサインした。フォガラに関する伝統法は以下の通りである。フォガラの流量の計測は、新しい出資者、並びに、既存の利権者の代表者の立ち合いの下に行われ、そのジェマー (Djemâa) (慣習的行政区分) のシャヘド (Chahed) (イスラム法の公証人) が持つ台帳に記録される。流量はハバ (habba Zrig') という単位で表されるが、1 ハバは約 8 リットル/分に相当する。契約書類には、フォガラの利権者たち、ジェマーの代表者たち、それにシャヘドが署名する。契約は原則 1 年間有効である。もし利権者の中に分担金を未払いだったり、分担分の仕事をまだ完了していない者がいた場合は、その人の分は勘定に入れず、残りの利権者たちの間で向こう 1 年の水の配分を決める。なお、フォガラの水量の季節変動は利権者全員が承知するものとされていた。堅井戸の増設によるハバの増加分は、半分が出資者のものとなり、あとの半分はフォガラ自体ものとなり利権者全体で分ける決まりだった。

この時の拡張工事では、工事後フォガラの流量は増加するどころか、かえって減少してしまった。新しい出資者はフランス駐留軍の隊長とカイドの覚え目出度い人物だったが、工事人夫たちがフォガラの勾配をおかしくしたせいだと言って怒った。この男は、隊長を言いくるめて、自分の言い分を信じさせ、工事人夫たちを投獄させた。哀れな囚われ人たちは、昼間はフォガラで過酷な労働を強いられ夜は監獄につながれた。彼らと家族の唯一の接触方法は、食べ物の差し入れだけだったが、看守に託すことしか許されず、直接

は会えなかった。彼らには全くの災難だった。しかし、フォガラは流量は計測する度にどんどん減少していった。人々はこれを神の裁きだと信じた。行政の責任者であるフランス軍の隊長は、件の出資者の言いなりだったので、この男の損した分を埋め合わせるため、フォガラの水の一部を彼の農園に迂回させよとの命令を出した。本当は伝統法に従えば、拡張工事が流量の増加をもたらさなかったのだから、この男には一切の権利がないのである。ただ、文句を言えるものは誰もいなかった。

アフリカでは『公正』と『不正』を擬人化した次のような物語が伝わっている。昔々、人類が地上に現れたはじめの頃、ある二人の男がいた。一人はやさしく慈悲深く寛大な『公正』で、理性的な彼は仲間の人間たちに対して良いことしかしなかった。もう一人は意地悪で憐みの心に欠ける『不正』で、聞き分けの悪い彼は仲間たちに悪いことしかしなかった。ある日この二人がそろって旅に出た。二人ともそれぞれ食糧を携えていた。だいぶ長く歩いた後、彼らは食事のために休憩した。『公正』は自分の食糧を取り出して、『不正』にも食べないかと言った。『不正』は躊躇わずそれをもらった。何度も同じことを繰り返し、ある日ついに『公正』の食糧は底を尽きた。次の日、また長く歩いた後、二人は休憩のため立ち止まった。『不正』は自分の食糧を取り出したが、「公正」と一緒に食べようとは言わなかった。『公正』は『不正』の食糧に手を伸ばしたが、『不正』は『公正』の手をびしやりと打った。

「どうしてくれないんだ。私は君に食べ物を分けてやったじゃないか。」

「私が無理にそうさせたんじゃない。君が勝手にしたんだ。私は君とは違う。」

二人は旅を続けたが、『公正』はついに力尽きて歩けなくなってしまった。

「条件次第では食べ物をあげるよ。」と、『不正』は言った。

「どんな条件だ？」

「君の片方の眼をくれ。」

飢えが最早限界まで来ていたので、『公正』は仕方なく条件を飲んだ。『不正』は『公正』の目玉をえぐりとり、代わりにほんの少し食べ物を分け与えた。二人は更に旅を続けた。そして、また同じことが繰り返され、『公正』はもう片方の目もえぐられて、何も見ることができなくなった。『公正』は『不正』に手を引かれて歩いた。以来、地上には『不正』が蔓延っているが、神は決して『不正』が最終的に勝利することは許さない。なぜなら、神がこの地上で行おうとしているのは『公正』だからである。

ハマジの孫の割礼

割礼。当時この手術は、子供があまり若い時期に行うことはなかった。私は 10 歳 (1947 年) か、もう少し大きかったと思う。もうその頃は既に、物事を大体認識できるだけの知恵はついていて、従って、この大変な痛みを伴った手術のことは、今でも昨日のことうのようによく覚えている。私の割礼の手術は、従兄弟のモハメッドのコーラン学校卒業のお祝いと同時に行われた。この従兄弟は、前述のルマンというフランス軍下士官と伯母のゾーラの間生まれた息子である。この下士官は、フランスに妻がいたが、アウレフでは伯母

のゾーラを娶った。つまり重婚である。このルマン氏は、アウレフの妻に息子をムスリムとして教育することを許していたので、従兄弟はコーラン学校に通っていた。後から聞いた話によると、私の父と伯母のゾーラが相談して、町の人たちが二重にご祝儀を出さなくて済むよう、私と従兄弟のお祝いを同時にすることにしたらしい。

この時の式典は、割礼の手術の前日から始まり 2 日間も続いた。前夜祭の日、家では皆が、招待客を迎えるための支度に飛び回っていた。儀式自体は、その日の夕方モスクの中庭で始まった。この儀式に際して、私と従兄弟は手と足をヘンナ（訳注：植物から採った赤褐色の染料）で染められ、目には黒く隈取りを施された。そして、ジェマーの主だった者たちが私たち二人を囲み、ボルダ（Borda）を斉唱する儀式を執り行った。これは、預言者ムハンマドの善き行いを讃える一種の歌である。歌が終わると皆で列をなして私たちの家まで行ったが、その有様は、まるで王様のパレードのようだった。家に着くと参会者たちはもう一度私と従兄弟を取り囲み、手を空にかかげ神に恩恵を祈った。そうして前夜の儀式は終わり、人々は引き揚げていった。私はといえば、翌日の割礼の手術のことで頭の中が一杯だった。なるようになるさ、と思うようにしたが、その日の夜は遅くまで寝付かれなかった。

翌日の儀式は早朝から始まった。モスクの庭の真ん中で、ジェマーの面々が立ち会う中、私はカーバの方角を向いて立たされ、その前に施術者が控えた。別の一人が私の顎に手をかけて上を向かせ、もう一人は足を押さえた。そして顔を上に向かせられたまま、口に茹で卵をつっこまれた。卵は、殻の中に塩とサフランを仕込んで煮てあった。卵を食べさせるのは、多分注意をそらすためだと思う。私は体の一部が引っ張られるのを感じ、抗おうとしたが、身動きできなかった。誰かが言った。

「お前は男だ。勇気を持て。怖がるな。泣いてはいけない」

人々がコーランを斉唱し、ブンという音がして、私は下腹部に脳天を突き抜けるような鋭い痛みを感じた。私は「うああっ」と獣のように叫んだ。施術者が、何か卵の殻にいられた液体を、私の傷口に塗ってくれた。私は泣きそうだったが、ジェマーの面々が言った。

「お前は男だから女のように泣いてはいけない。服を手でたくし上げたままにして、家へ帰りなさい。」

私は一目散に駆け出し、モスクからの長い道のりを全速力で駆け、伯母のゾーラの家へ飛び込んだ。途中道で二、三人の女たちに出会ったが、彼女らは私を見ると「ユーユー」という声（訳注：アラブやアフリカで祝い事の際などに女性が喉の奥から出す口笛のような音）を上げた。これは「おめでとう」という意味である。伯母のゾーラの家へ着くと、ここでも私の帰りを待っていた沢山の女たちが、同じユーユーという喜びの声を上げ、まるで英雄の帰還のように私を出迎えた。彼女たちは口々に私にお祝いを言ったり、偉かったねとほめそやしたりした。私は、頭を枕にあて、横向きの格好で砂地の上に寝かせられた。血を吸った砂は時々新しいものと交換された。泣くまいと努力したけれど、痛みは増すばかりで、私はついにこらえきれなくなり泣き出した。しばらく泣いていたと思う。私を周

りで見守っていた女たちも泣いた。私は、彼女たちは何もされてないのに、どうして泣くのだろうと思った。

この日も、お祝いごとは続いたが、私は手術の傷が痛くて行事に加われず、後で年長の学校仲間たちから、どんなことが行われたのかを聞いた。それによると、モハメッドは前日と同じくヘンナを施された後、馬に乗り、アウレフ中央地区の全てのモスクを回った。彼の後には、町の名士や招待客が大勢、ボルダを斉唱しながら付き従った。最後は墓地の聖人の墓を詣でて（訳注：聖人の墓＝「マラブー」を崇拝するマグレブやアフリカ特有の信仰形態）、そして家へ戻った。祝宴の席では、従兄弟はカーバの方角を向いて座り、その周りを取り囲むように招待客たちが座った。モハメッドは、前身ごろにポケットを縫い付けた特別の服を着ていて、お客たちは代わる代わるそのポケットに、ないがしかのお金を入れて行った。その間に、コーラン学校の教師たちは、書字版にコーランの節を一節ずつ書いて行った。宴の最後は、両手を三回空にかざして祈りを捧げることで締めくくられる。お客たちが退出する時、祝いの主役の子供は、大麦をいっぱい入れたタズア (tazoua) を抱え、帰っていくお客たち一人一人に、その大麦を一掴みずつ与える。儀式を終えたばかりの無垢の子供の手からもらうこの一掴みの大麦は、貰った者の家族に幸福をもたらすと信じられていた。この儀礼を通過した子供には、その日から社会の中で相応の敬意が払われるようになる。式典が一通り全て終わると、集まったご祝儀は、コーラン学校のタレブの立ち合いの下、その家の者が集まって総額を勘定するが、一部はタレブにお礼として贈られる。

さて、私はと言えば、最初の二週間は床を離れることすらできなかった。傷が治るまで毎朝父が私の手当てをしてくれたが、かなりの量の塩を入れた水で洗うので、とてつもなく痛かった。私は何度もヤギの鳴き声のような悲鳴を上げた。塩水で洗った後は、傷口に灰を塗った。何度かかさぶたが尿道を塞いでしまったこともあり、結局完全に回復するまで何週間もかかった。一方で、この療養期間中、家族のだれかが絶えず私に着き添ってくれ、食事もいつもより多くくれて、しかも毎日肉が食べられた。手当ては、最初は毎日だったが、そのうち二日に一度になって行った。傷がやっと治ってきたある日の夜のこと、とても寒い日だったので、母と、まだ小さかった妹のゾーラと私は三人して、鍋をかけた干し煉瓦製の七輪の周りにうずくまっていた。母が私に何か持って来るように言い、私は束の間席をはずした。その時、妹が手に持ったナイフを振り回して鍋に当たり、鍋は倒れて沸騰した中身が、寸前まで私がいた場所に飛び散った。私が戻ってみると、母は、神が私を救ってくれたと、感謝の祈りを捧げているところだった。翌日母は、私がコーラン学校へ出かける時、神が私に下された恩恵のおすそ分けをしなさいと言って、コーラン学校の仲間たちへの贈り物を持たせてくれた。

月蝕



イメージ画像：アウレフ地方の月（2002 年記者撮影）

私は何週間もかかって、やっと割礼の傷から回復し、再び遊びに出かけられるようになった。コーラン学校も一か月休んだが、また通い始めた。

「休んだ間の遅れを取り戻せるように全力でやらなければならないよ。」

タレブは私に言ったが、この言葉に私ははっとした。「がんばれ、がんばれ！」と、どこからともなく声がする気がした。あの晴れやかな学業成就のお祝いをしてもらった従兄弟に負けないようにしなければならない、と私は思った。私は俄然はりきって、朝は早くから学校に出かけ、タレブが読み上げるコーランの節を必死になって書字版に書き、完璧に覚えようとがんばった。そしてついには、夜は家で眠らないことにし、モスクの庭の砂の上で寝泊まりした。そうすれば、翌日の早朝の礼拝で、習ったコーランの節を直におさらいが出来るからである。ある晩、モスクの庭で眠っていると、ゾーラ・バカディア (Zohra Bakadia) という名の若い女がやってきて、私たちを揺さぶって起こした。

「起きなさい！起きなさい！世界の終わりよ。それなのに寝ているなんて。空で何が起きているか見て！」

月が輝きを失い、赤く染まっていた。子供だった私と私の学友たちには初めて見る光景で、何が起こったのか分からなかった。

「太陽が月を締め殺そうとしているの。私たちが月に力を貸さないと、世界が終わって私たちは死んでしまう！」

そうゾーラ・バカディアが言ったので、私たちは鉄の箱を叩いて可能な限り大きな音を立て、歌った。

「月よ、みんなお前の味方だ。がんばれ、がんばれ！」

ゾーラはこうも説明した。

「こうして音を立てれば、太陽はこっちを見て、そのはずみに力を緩めるから、その隙に

月は逃げ出して自由になれるのよ。」

一晩中私たちは道から道へ騒々しい音を立てて歩き回った。家々から女や子供が出てきては私たちの列に加わったので、しまいには一行は何十人にも膨れ上がった。しばらくして、月はいつもの輝きを取り戻した。群衆から拍手喝さいが起こった。

「月は救われた。みんなのおかげで月は救われた！」

お蔭でその後私たちは、すでに残り少なくなった夜を安堵のうちに過ごすことが出来た。ゾーラ・バカディアは私と仲間の子供たちに言った。

「ご褒美に明日デーツを一掴みずつあげるから、うちへいらっしやい。」

私と仲間たちがコーラン学校の庭に戻ると、もう夜明けの礼拝を告げるムッザーンが聞こえて来た。翌朝は、疲れと寝不足で完全に頭がぼうっとしていた。